九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

原田憲雄氏の李賀論文

上尾, 龍介
九州大学教養部 : 助教授

https://doi.org/10.15017/9820

出版情報：中国文学論集. 3, pp.53-64, 1972-05-01. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

書評

原田憲雄氏の李賀論文

上尾龍介

原田憲雄氏は、感情豊かな詩人であり、すでに「夜の歌」（昭・三二年七月）・「無花果の骨に」（昭・三五年二月）・「南の風」（昭・四一年二月）など三冊の詩集を世に問うている。そしてまた尾上柴舟の流れを受ける水甕派の歌人でもあって、その作品は歌集「墳墓」（昭・三二年十月）に集められている。このように創作の面で、多くの労作を残している同氏は、同時に、中国の詩の研究の面においても、多くの著作を残しているのであるが、詩人的素質に恵まれた研究者らしく、その業績の一部は、既に三冊のユニークな訳詩集となつて世に行われ、その力量を高く評価されている。即ち「幽歓集」（昭・三一年七月）・「平松集」（昭三三年一月）・「蓼莪集」（昭・三九年九月）が、それである。

以上は、すべて京都「方向社」の出版になるものである。これらのほか、集英社の漢詩大系に収められるものとしては、「王維」（小林太市郎氏と共著・昭三九年八月）「韓愈」（昭四〇年一月）があり、また同社の中国詩人選「王維」（昭四二年四月）がある。

これらのうちの最初の著書である「幽歓集」（昭三一）から、最も新しい「王維」（昭四三）に至るまでの十一年の間に、十冊に及ぶ著述が、精力的に世に問われたのであつた。

所で、これらのほかに、昭和二八年以来、氏は雑誌「方向」を主宰して来られ、これは不定期刊ながら、着実に号を重ね、現在までに（昭四六年八月号）十四号を数えるに至つている。この雑誌は、数人の同人の筆に成るものであるが、しかし原田氏の文章がその大部分を占めており、氏の個人雑誌の感が深い。この自由な雑誌に、氏はさまざまなことを書きとめているが、それらはすべて、中国の詩、および詩人についての研究の道程に成つたものであり、執筆の中軸をなしている研究も翻訳も、のびのびと自由な筆で書き継がれている。これらの文章を、氏自身が楽しんで書いたか否かは別として、これらは、読んでまことに楽しいものである。そこには潘岳のこと、寒山のこと、王昌齢、顧況、常建、袁中郎のことその他、さまざまなことが書かれているのだが、中でも李賀に関することが最も多く、その大部分を占めている。方向社から出されたこれらの著書および雑誌は、すべて、原田氏が自ら原紙を切って謄写版にかけた、手づくりの書物であり、題字から目次、更には正誤表に至るま

で、心こめて書き込まれた丹精の著述である。そして、これらはすべて、これまで、同好の人々に、至つて控え目に、遠慮がちに配布されたのであつた。原田氏の関心は、中国の詩全般に及んでいるが、その関心の中心は、やはり李賀であり、李賀の研究は、氏の生涯の課題として、今後も営々と続けられてゆくことであろう。

原田氏の李賀研究の成果が形としてあらわれたのは、昭和十六年十一月、龍谷大学文学部に提出された卒業論文「李長吉」が最初である。以来、昭和四十五年に至るまでに次のような文章が発表されている。

昭和二十八年

白玉楼中の人　――李長吉をめぐって――「方向」一号

李長吉詩鈔　（翻訳）「方向」一号

白玉楼中の人　「水甕」六月号

露滴　「大乗」七月号

筆補造化天無功　――李長吉をめぐつて――「方向」二号

昌谷詩　（翻訳）「方向」二号

昭和二十九年

禍機　――李長吉をめぐつて――「方向」三号

夫人飛入瓊瑤臺　――李長吉をめぐつて――「方向」四号

離歌　（翻訳）「方向」四号

昭和三十年

石破天驚逗秋雨　――李長吉をめぐつて――「方向」五号

昭和三十一年

幽歎集　（単行本）　方向社刊

明月珠　（翻訳）「方向」六号

補悲　――李長吉をめぐつて――「方向」六号

帰郷　――李長吉をめぐつて――「方向」六号

昭和三十二年

墳墓　（単行本）　方向社刊

昭和三十三年

平松集　（単行本）　方向社刊

幽眼　（翻訳）　「方向」八号

上尾　②

昭和三十五年
頌歌　——李長吉をめぐつて——　「方向」九号
玉琴　——常建をめぐつて——　「方向」九号
無花果の骨に　（単行本）　方向社刊
昭和三十七年
長歌続短歌　——李賀小記——「人文論叢」七号
昭和三十八年
金銅仙人辞漢歌　——李賀小記——「人文論叢」八号
昭和三十九年
十二月楽辞　——李賀小記——　「方向」十号
夢裁集　（単行本）　方向社刊
昭和四十年
韓愈　（単行本）　集英社刊
昭和四十一年
南の風　（単行本）　方向社刊

上尾　③

楞伽　——李賀小記——　「人文論叢」十四号
昭和四十二年
莫種樹　——李賀小記——　「方向」十三号
王維（中国詩人選6）　（単行本）　集英社刊
白玉楼中千百五十年　「漢詩大系・月報」
馮小憐　——李賀小記——「人文論叢」十五号
昭和四十三年
負薪　——李賀小記——　「人文論叢」十六号
火宅　「海」三十号
昭和四十四年　四十四年
杜序　——李賀小記——　「人文論叢」十七号
宝塔　——岑参伝論——「花園大学研究紀要」創刊号
悩公　——李賀小記——　「人文論叢」十八号
幻の暁　「日本歌人」一九七〇年夏号

以上が、昭和四十五年までに氏によつて書かれた李賀に関する文章である。これらの中には、李賀について専ら述べられたもののほかに、「玉琴」は、常建と李賀とのかかわりについて少し述べられたものであり、「宝塔」は、岑参の詩における「奇」と李賀の詩における「奇」とについて比較されている。といつた具合に、側面から李賀について論ぜられたものもある。また詩集「無花果の骨に」「南の風」などの創作面の労作においても、作品のなかに李賀にふれたものがあり、また、集英社の漢詩大系「韓愈」や、同社の中国詩人選「王維」には、所どころで李賀が顔を出している。また、「火宅」「幻の暁」などは、「日本歌人」や同人誌「海」に書かれた文であり、「わずかに李賀にふれるもの」と氏は述べてをられる。右に列挙した四十篇に垂んとする多くの文章の一覧表は、雑誌「李賀研究」創刊号に掲げられたものであり、このうち、私の未見のものも幾篇かあるが、それらは、前記の同人誌等に書かれたもの等であり、これらを除いて、専ら李賀について述べられたもののみを改めて集めて見て、氏の李賀に寄せられた情熱に、今更のように感嘆するのである。これ程丹念に、さまざまの角度から、李賀を論じ、そして書き続けた学者を、我々は嘗て知らなかったし、一人の手によつて書かれたこれ程大量の李賀論を、我々は嘗て持たなかった。李賀の詩は、きわだつて鋭角的な美意識に支えられたものであり、中国の詩が一般に持つ常識性を拒否した所に成り立つ難解なものであつて、その一点に人々は古来常に魅せられるものを持ち続けて来たし、それの解明に、人々は常に駈り立てられて今日に及んだのであるが、多くの研究者は（愛好者は）数篇の論文を残して、その祭壇の前をひとまづ立去ることがしばしばであつたように思われる。そして、それらはそれなりに、それぞれ李賀詩の本質を指摘していたと言えるのである。しかし、原田氏の場合はそうではなく、三十年間一貫して、李賀を論じ、李賀を咀嚼し、そして自分の精神の（感情の）一部にまでなつてしまつた部分を、情感あふれる美しい日本語であかず歌い続けているのである。原田氏の訳文を読む者は、李賀が、そのまま原田氏を通過してそこに現出しているのを発見するにちがいない。翻訳という形式的なよそよそしい言葉は、原田氏の場合はまことに不似合いであり、やはり、日本語による歌い替え、とでも呼ぶにふさわしい、すぐれた李賀詩の再現が、そこには見られるのである。我々は原田氏ほどのすぐれた李賀詩の訳者を嘗て持たなかった。

原田氏によれば、始めて李賀を知つたのは中学二年生の時、町の本屋で偶然李賀の詩集を求めた時にはじまるという。漢詩大系「李賀」の著者・斉藤晌氏も、やはり中学二年頃、始めて李賀を読んだ由であり、現代のこの二人の李賀研究の先達が、共に少年の日に李賀に心を奪われたことは、興味ある一致である。原田氏は、自ら次のように述べている。

十五才のわたくしが賀の詩にひきずりこまれたのはなぜだつたか。(中略)三十年たつてもなお賀の詩から立去りえないのはなぜなのか。これはおのれを知るためにも、わたくしの解かねばならぬ問題である。「あれはおとなの詩ではない」と専家はいう。賀が二十七才で白玉楼中の人となつたことをさしていうのではない。はたち前後でつくつても蘇

東坡や黄山谷のものはおとなの詩だ。というのである。さしずめわたくしなどはすでに班白となつてなお少年の域を脱しない穉頑の魯人ということになるのであろう。

このように述べた後、鈴木虎雄注の「李長吉歌詩集・上下」(岩波文庫・昭和三十六年)のことに触れ、古稀をこえたこの老詩人(と原田氏はいう)の業績のすぐれるゆえんを、次のように説明している。

> 禹域の注家が解きあぐねたかれの本質から発する微妙を、しばしば安らかに説き明かしたのは、いわゆる「おとなの詩」の保守性からはみ出したところに博士の心耳が傾き、賀の韻律に共鳴したからであろう。

として、鈴木博士の詩人的素質が、李賀詩の解明に大きな力となつたことを述べつゝも、この時の博士の年令が既に古稀を越えていたことにもとずくその限界について次のように述べている。

> 博士の昌谷詩解も、仔細に見れば疑うべきところはすくなくない。少年にしか見出し得ない真実というものがあるもので、博士の老手もそこには及びかねたかと察せられる。

ここに「少年にしか見出し得ない真実」という言葉が記されているが、この言葉は、氏が李賀について述べる際に、しばしば用いるものであり、李賀詩の真髄に触れる鋭い指摘を包んだ言葉である。鈴木博士の詩心と学殖とをもつてしても、なお解き得ていない李賀詩の扉の重さを、それは博士の年令のゆえだと直感することの裏面には、原田氏自身の、身を灼く嗟嘆が秘められていると見ねばなるまい。それは、抗い難い時間の流れというものへの呪詛ではないか。李賀詩の秘密のいくばくかを、すでに垣間見た早熟な遠い少年の日の驚きが、氏をして三十余年に及ぶ李賀への絶ち難い執着を呼びおこしたのであろうが、それは言いかえてみれば、詩が青春の文学であるという一面の真実が、中国の伝統的な詩歌には本来的に乏しく、それは却つて、わけ知りのおとなたちの玩弄物でさえあり得たという中国詩の常識的な一面が、大きく表面に浮かび出ていることへの嫌悪と絶望の感情が、氏をして、今日まで李賀の門前を立去らしめなかつた最も大きな理由であろうと考えられるのである。中国の詩の多くが、詩は青春の文学であるという一面の真実を失つている以上、そしてまた、常識人の玩弄物でさえあり得るという一面の性質を身につけている以上、「研究」的「業績」ならば、詩心を失つて既に久しい世のおとな達によつても、それは可能であるに違いない。というよりも、むしろ、世のわけ知りのおとな達であつてこそ、理解し得るもう一面の真実が、そこには、より多く存在するかも知れない。だが、それは真実ではあつても、必ずしもそれが美であると言えるかどうか。そして、それらのおとな達の眼に、少年李賀の透明な詩心の風光が果して見通せるものかどうか。原田氏は、こゝの所を充分に知つているのである。そして知つているが故に、その嘆きは誰よりも深いのである。

李賀の世界は、鋭くみがかれた美の世界であり、李賀がその堅い扉を開くのは、少年の、みづみづしい詩心に対してだけではないのか。しかし、その難解な詩の扉を開くためには、どうしても、人々は知識の木槌を手にせねばならぬ。これもまた容易

なことではない。時は流れてゆく、李賀のとりこになつた少年が、錆ついて開かぬ鍵穴を見出して、木槌を求める旅に出た日から、時間は風のように流れ去る。或る少年は旅に出たまま遂に帰らなかつたし、或る少年は、再び帰つた自分が、もはや昔日の少年ではないことを嘆かねばならなかつた。

原田氏はこの嘆きを誰よりもよく知つているのである。この嘆きを埋めるものは何か。この困難な問に、誰かがいつかは答えねばならぬ。そこで、氏は一つの「こと」を起したのである。つまり個人雑誌「李賀研究」を世に問うことにしたのであつた。

「李賀研究」は専ら李賀に関する文章のみを掲載した隔月刊の個人雑誌で、京都「方向社」の発行。販売所「朋友書店」は右京区太秦一ノ井33—7。特殊と言えばこれ程特殊な雑誌も稀であるが、しかし、昭和四十六年一月の創刊号以来、現在まで確実に号を重ねている。それぞれの号の各ページには、たとえば、第六号の三五頁ならば、「陸・三五」の文字が、小口の下の隅に記されてをり、頁の地の部分の中央に、285という洋数字が入れられている。これは第一号からの通しのページ数であり、各号を綴ぢ合せて行けば李賀研究の専著が出来上るように配慮されている。この配慮は、さりげないもののように思われるけれども、私には、氏の深い覚悟が心に重く残つてならぬのである。

嘗て、昭和二十八年に、雑誌「方向」が刊行された時、そこには各号のページ数のみが記されているだけであつたが、今、私の手もとにある原田氏所蔵の「方向」の合本には、丁寧な朱筆で、通しのページが記入されている。

「李賀研究」創刊号は、次のような序文ではじまつている。研究というと大袈裟だが、わたしの気持では、研はすずりで、究はつきる、つまりすずりの水の無くなるまで、というほどの意味である。(中略)わたしの世すぎは、決して滑らかではなかつたが、平板であつたことは確かである。その平板な人生に、なんの因果か、李賀という鬼才を見出した。川の底の平たい石に妖しくも美しい水草がたゆとうているに似なくはない。(中略)この雑誌は、わたくしの硯がたたえる数滴の水からつむぎ出す李賀にまつわるいくばくかの文字を収めることを目的とする。(中略)わたくしの拙文だけで紙幅を満たすことになろう。発行の期も定めぬけれども、二ヵ月に一冊は出したいものと思つている。云々。

こゝに、原田氏の、雑誌「李賀研究」に対する姿勢は言いつくされている。そして、その言葉の通り、氏特有の語り口で、論じ来り論じ去つて尽きることがないのである。李賀に関するまとまつた一つの意見としてでなく、その周辺の雑多な素材としての、しかし李賀詩の理解のためには捨て去ることのできない幾多の記録などまで含めて、この「李賀研究」は編まれている。研究の裾野の広がりを、次第に、多方面に亘つて拡げている氏としては、このような雑録の性質も兼ね備えた専門誌を作ることはいつかなされねばならなかつたことであるし、読者の側から言えば、文章の底に、或いは裏面に沈んでしまつて、遂に忘れられ、捨て去られてゆくであろう小さな事実の切片がここにもれなく記録されることによつて、李賀の全貌は、より的確に描かれるのである。そして更に重要なことは、原田氏がそのよ

上尾 ⑥

うな記録を、明らかな一つの意図のもとにおこなつているということである。氏はこう述べている。

わたしの弟の原田禹雄は医師だが、実験や診療の上の失敗を丹念に記録するという。同じ失敗を人々が繰り返さなくともいいようにそうするのだという。人文科学の研究では、過去の過誤の記録をつみかさねる努力がされているのだろうか。「論争も避けるのが君子という風らしいな」と、これは学会というものにほとんどつながりを持たぬわたしとしては軽はずみなことをいうと、「その方のことは知らんが、近頃では医者の中にも成功の記録は発表するが失敗の記録を抹殺するような傾向も無いわけではないらしい、つらいことだな」と答えた。わたしは弟のその言葉にはげまされて、失敗と過誤の記録をも明らかにここにとどめておこうと思う。

皮膚科の著名な学者であり歌人でもある禹雄氏とのさりげない会話が記されているのであるが、こゝには明らかな意図が語られている。これは、後に続く李賀研究者に対する、いかにも氏らしい配慮である。こゝで、またも原田氏の言葉を借りねばならない。

少年の日にしか見出せぬ真実というものがあり、李賀の詩はまさしくそれだ。だとすれば李賀の詩を本当に理解するものは少年であろう。わたしはすでに李賀の読者たる資格を失つている。少年の日に親しんでかれが果して友として許すかどうかもわからぬままに、かれのもとから立ち去りえない。永遠に少年であるかれの前で、皺だむおのれの手を見ていると、無惨だが、もしできるものなら、新しい少年が李賀の新しい真実を掘りおこしてくれるのを見まもりたい。

近年、書肆は再三に亘つて原田氏を訪れ、李賀詩の注釈書の出版を求めている模様であるが、氏はそれを強く拒み、若い世代の研究者の名を挙げて推し続けていることを知つたが、李賀詩を語るには私は既に老いたと、そのように語る氏の感覚こそ、まぎれもなく、李賀に魅せられたみずみずしい詩人の感覚であり、その故にこそ、李賀は原田氏によつて語られねばならぬだろう。古く、一九四〇年の暮に書かれた氏の文章は、そのことを、既に充分にもの語つている。

言葉にまで発展しない思惟は気分にとどまる。気分とは、最も不確実な「生命の影」である。人間の詩活動とは、この不確実な影を見つめて確実な実体を発見し、この実体よりして、あらゆる影を再成する努力である。詩人の努力は、影より実体をひき出し、再び(もとの影よりも多彩な)影を作り出すに終る。読者の作業は、多彩な作品から不動の実体を見ぬくにある。すぐれた読者は、或ひはその実体の彼方に、詩人がそこから実体をひき出した影をも透視するだろう。けれども、これは至難のわざといへる。詩人は、自らより作品にいたるプロセスを示すことは許すが、それ以前のものを示すことを欲しない。というよりも、それを意識している詩人はわずかなのだ。意識してゐる作者も、彼の作品をより完璧ならしめるためには、もとの影が已れの作品に翳ることを恥ぢるだろう。(傍点上尾)

上尾 ⑦

この言葉は、詩作の秘密を語る詩人自らの言葉であると共に、その読者である研究者の一つの方向を——理想的な一つの方向を言い当てた言葉でもあると言えよう。詩人の眼と研究者の眼との双方が、こゝではしっかと結び合つている。二十才の青年原田氏の心を浸したこの認識は、氏の李賀研究の基本的な姿勢となつて、今日まで貫かれている。李賀を得たことが氏にとつての幸福であつたとするならば李賀が氏を得たことも亦李賀にとつての幸福だつたと言わねばならないだろう。李賀はやはり原田氏によつて書かれねばならない。

所で、このような氏の鋭い視点は、李賀詩の至る所に斬新なメスを振うことになるのであるが、その一つをこゝに挙げてみよう。

それは、四十九韻九十八句からなる「昌谷詩」や、五十韻百句からなる「悩公」の二篇に関する新しい見解についてである。

この長篇の二詩を、従来の註家はすべて単なる長篇の詩だと見ている。たとえば近人鈴木虎雄、葉葱奇、斉藤晌、陳弘治、草森伸一の諸氏も、ことごとくそうである。しかしながら原田氏は、これを独吟聯句であると見るのである。独吟聯句とは、作者が假設した二者の対話の形で進められて行く聯句である。李賀が、聯句に熱心な韓愈の門に在りながら、韓愈およびそのグループの人々と聯句を巻いていない点に、まず原田氏は疑問を抱き、そこに何等かの秘密を見出そうとした。その時ヒントになつたのが、「昌谷読書示巴童」と「巴童答」の二詩である。これはいずれも、五言四句の短篇であるが、前者は、李賀が彼の侍童である巴童に示した詩、後者は、巴童が李賀に答えた詩（勿論、巴童に代つて李賀自身が歌つたものである）である。つまりこの二詩は問答の形式をとつているのである。

病弱でありそして不遇な自分に仕えて、身辺の世話などする彼に感謝して

蟲響燈光薄　虫すだき　灯火　うすく
宵寒薬気濃　宵冷えて　匂う　煎薬
君憐垂翅客　尾羽枯らす　われを憐れみ
辛苦尚相従　苦しみてなほ　従ふよ　（原田訳）

と言う李賀のことばに答えた巴童のことばを、李賀は、次のような詩に仕立ててやつているのである。

巨鼻宜山褐　大き鼻　野良着に合ひて
脽眉入苦吟　秀でし眉　苦吟したまふ
非君唱楽府　きみ　楽府に　歌ふならねば
誰識怨秋深　誰か識らむ　秋のあはれを　（原田訳）

このようなことばは、日常しばしば交したであろう普段の会話であるが、それが問答の形の詩に作られていることに原田氏は着目している。巴童と李賀との間にはこのようなことが、しばしばあり得たのではないかと。そしてこの疑問は、長篇の「昌谷詩」に向けられたのであつた。そして、この詩のなかに、氏は果して会話の微妙な息づかいを感じ取つたのであつた。この大胆な推定は、自らが詩の実作者であるという所から生まれて来ていると思われる。氏は、この推定を裏付けるために、さまざまな、こまかい議論をくり広げるのであるが、今はそこには触れない。但し、この論文は、いま書きはじめられたばかりであり、今後、「李賀研究」誌上に連載されることであろう。

これと同様の推定は、百句におよぶ長篇の詩「悩公」についてもなされている。この場合の推定は「悩公」という、意味のさだかでない詩題の解釈が手がかりとなつている。以下、しばらく氏の説明を聞いてみよう。

「悩公」とはなにか。呉正子は「題の意味がよくわからないが」といいつつ悩については悩ますというほどの意と解し、王琦注は「可愛い、というかわりに憎らしいというが、そんな意味あいだ」と説明する。では、公とはどんな意味か。釈六如「葛原詩話」には、白居易・李賀・杜牧などを引いて「コレラノ公ノ字ミナ、我身ノコトヲサシテ公ト云、他人ヲ指スニアラス、俗ニ戯テヲレサマト云ヤウナルコトナリ」と説き、猪飼彦博「葛原詩話標記」、津阪孝綽「夜航詩話」も、大よそ同様のことを述べる。鈴木虎雄注が「悩公」を「おれ様をなやますもの」と解くのは、たぶんこれらによつてであろう。しかしこれがもし独吟聯句ならば、別の解釈を入れる余地がありはせぬか。

古い楽府に「歓の揚州に下るを聞く、相送る楚山の頭」といい「風吹きて窗簾動く、疑ふらくは是れ所歓の来たるか」という。「歓」と「所歓」は、いずれも恋人のことで、多くは女から男をさして呼ぶことばである。それならば、男から女の恋人にむかつて「悩」とか「所悩」とかいつた呼び方が、あつたのではないか。前代の詩文から用例をあげ得なくて残念だが、彼が作つて友人達の間にはやらせた場合が考えられよう。当時は、例えばふるさとを意味する「故園」を「妻」または「恋人」にあて用いるなど、新らしい流行語がぞくぞく生まれた時代で、彼は、そのさきがけの一人であつたのだから。

悩が恋人で、公がヲレサマならば、悩公は女のあなたと男のわたしであろう。女であるあなたと男であるわたしとの、恋の口説のたたかいである。恋の口説は、当事者ふたりの胸にしまいこまれるもの。その一方がぬけぬけ文字にして公開できるものではない。発表するからには、そこに必ず假構があると考えるのが、ほぼ中国の伝統詩文におけるならわしであろう。陳本礼注が「一つの構成されたフィクションとしての詩」とするのは卓見である。「悩公」の恋の口説も主人・女主人を千年ちかくさかのぼらせて、「宋玉」「董嬌嬈」ということにしてある。

原田氏は大よそ以上のように述べたあと、こまかい解説に入り、結論の部分において次のように述べている。

聯句は、かれ以前に長い歴史があり、艶体の詩もすでに伝統をかさね、長篇は彼の時代の流行であつた。「悩公」は、これらの歴史と伝統と流行とから生まれたものといつてよい。ただ聯句を、自らのうちの他者を相手とする「独吟」という形で展開し、艶体の長篇に応用したのは、おそらく彼が初めであつただろう。「悩公」は、終始、対話であり、ことばのせめぎ合いである。最後の一句をのぞいては、すべて対句であり、その対句を、対話者が互いに支えあい、五十韻を二十五韻ずつ受けもつて、全く対等の立場において男女がことばをたたかわせている。

聯句は、もともと複数の人たちが、ことばの争いによつて諧和するいとなみだった。他者をおのれの外部に見出だす人たちが、韻律というメディウムによつて、共同を成立させるのであ

る。だが、すでにおのれの内部に他者を見出し、おのれの外部の他者の共同にいつわりを嗅ぎつけてしまつた人が、常におのれの内部であらそう言葉と言葉に悩まされながら、なお外部の他者をまねいて言葉を戦わせることは、無意味であろう。賀が、聯句に熱心な韓愈の弟子でありながら、愈らと聯句を巻かずに独吟したのは、恐らくそのような事情によつてであろう。韓愈の文学は群居の文学であり、知識人のサークル文学である。李賀もまた知識人ではあつたが、群居しえないものをおのれの内部に見出したために、孤独のなかで自らのうちの他者と対話せねばならない詩人であつた。かれのうちなる他者は、たぶん複数で、その有力なひとつは、おのれと性を異にするもの、すなわち女性であつた。李賀がおのれの内部の男性と女性のせめぎ合いから生み出したもの、それが聯句「悩公」であるに違いない。

原田氏は右のように述べて、李賀だけに見られる独吟聯句という形式の、発生の由来にまで論を及ぼしている。この独創性に満ちた見解が、広く一般に定着するまでには、今後、更に論争が繰り返されねばならぬであろうが、この独吟聯句という思い切つた着想は、すでに昭和三十一年に発表された論文「帰郷」(方向・六号)に述べられている。この時、ひかえ目に示されたこの見解は、以来十五年にわたつて、いちずに温められて来たが、遂にそれは「人文論叢・十八号」(昭和四十五年六月)に「悩公」と題して世に問われ、また昭和四十六年十一月には「李賀研究」第六号に「昌谷詩(一)」となつて発表されたのであつた。「悩公」は、約百三十枚にまとめられて一回で発表されたが、「昌谷詩」は、すでに二十数枚が費されながら、なおわずかに三句しか説かれていない。長大な論文が予想されるものである。

ともあれ、他者を拒んだ李賀の孤独の中から、この独吟聯句という形式は必然的に生まれたと考えるその発想の基盤は、やはり原田氏の個性に深く根ざしていると思われる。それは、孤独な詩人にして、はじめて理解し得る孤独な詩人の境地であろうからである。

この独吟聯句という解釈は、まさに人の意表を突く指摘であったが、同じく意表を突く見解として挙げられるものに「三長吉」と題する論文がある。(「李賀研究」第二号・昭和四十六年三月)これによれば、李長吉は三人いた、というのである。一人は鬼才と称された李長吉、つまり我々の李賀である。次の一人は、同時代にいた「李賀長吉」という人。更に次の一人は、やはり同時代にいた「李長吉」という人である。原田氏はこの三人を長吉A・長吉B・長吉Cと名づけ、李長吉が三人も存在したことから来る、さまざまな混乱を、一つずつ解明してゆく。これは謎ときのような緊張を伴った綿密な考証であるが、その過程で、斉藤注の誤り、王琦「李長吉歌詩彙解」の誤り、陳弘治「李長吉歌詩枚釈」の誤りを明快に指摘し、そして更に、李賀集のなかに長吉A以外の作品、つまりB・Cの作品が幾分かまぎれこんでいるであろうことをも的確に指摘している。

以上、氏の論文について、とりとめもなく述べて来たが、なおも述べねばならぬすぐれた意見はあまりに多く、私は自分を失いそうになるのであるが、こゝで気をとり直して、更に教えられた若干のことを記してこの稿を終ることにしたい。それは幕末の頃の豊後国佐伯の詩人中島子玉のことである。清の愈樾

の編になる「東瀛詩選」の巻十七の中島大賚がそれであり、愈樾の説明によれば、

字は子玉、号は米華、豊後の人、著に米華遺稿二巻あり、子玉、官は儒官、学政を主る、年僅かに三十有四にして卒す（中略）亦た奇士なり、詩は未だ刊刻せず、ただ写本の字跡の多く辨ずべからざるものあり、故に録する所多きことなきも、その佳句は固より此に尽きず。

となつており、三十四首を録している。彼は李賀に傾倒し、李賀にならつた詩を書いていて、中に一首「夢李長吉」と題するものがある。ということである。山陽を驚かせたといわれるこの人は、早熟な才を抱いたまま、天保甲午三月十五日（一八三四）に死んだという。三十四才。少年の日に李賀の秘密を知つた人であろう。

更に一人。これは、現代英国の女流 Elizabeth Jonning である。彼女の詩は、まだ殆んど邦訳がなく、片瀬博子氏の訳が、詩誌「地球」に、近く掲載される予定になつていることを、私はこの文の執筆中に知つたが、原田氏は、すでにいち早く彼女に注目している。「方向」十三号（昭和四十二年）の、「莫種樹——李賀小記——」が、それである。莫種樹は五言四句の短詩であるが、これは、移ろいゆく時の流れに死の影を見て脅えた李賀の心を、最もよくあらわすものの一つであると、私は見るのであるが、原田氏は、同じ見方に立ちながらも、氏自身の悲痛な体験を通して、更に巾広い解釈に立ち、そこから Jonning との共通な感情を見出している。氏がとりあげた彼女の詩は、"Absence" と題する作品であるが省略する。原田氏は言う。

……女士の二句はほとんど賀の語の翻訳とみなすことができる。ただ、賀ならば、"the place was just the same" 以外の語ははぶいたであろう。女士は賀の隠したところを露わにし、賀は女士の露わにしたところを隠すことに、作詩の鍵をおく。

と述べ、更に次のように言つている。

……女士は賀を知つているだろうか。女士についてはほとんどなんの知識もないが、オックスフォードを出て、そこの図書館の司書をつとめBBCにもかかわりをもつひとだときく。近ごろ英人のあいだに李賀愛好者がふえているというから、女士もあるいはそのひとりであるかも知れぬ。といつても女士が李賀を模倣しているなどということをのべようとするのではない。

原田氏の研究の裾野は、このように、どこまでも広がつて行くのであるが、そこには常に詩人の直感と学者の眼との融合が見られるのである。そこには、意表を突く着想の鋭さと読みの深さとがある。氏の研究の集大成が望まれるゆえんである。しかしながら原田氏の本領は、単に、積み上げられた研究論文の厚みにだけあるのではないことを我々は知つている。氏は研究者である前に、何よりも詩人であるからだ。詩人鈴木虎雄博士も、斉藤晌博士も、遂に李賀詩を美しい日本語に植えることはなかつた。これは、詩人原田憲雄氏に課せられた終生の事業であると思われる。

最も李賀らしい作品として、その代表作の一つに数えられるものに、感諷五首の「其の三」がある。これは、従来の詩人た

ちに絶えて歌われることのなかつた真夜中の墓地の幻想的な風景である。枯れ草に雨が降つていたとばかり思つていたのに、月はあたりを昼のように照らしている。くぬぎ林を更に歩いてゆけば、いましがたまで雨とばかり思つていたものは、おびただしい鬼火であり、それらは、まるで蛍のように、墓地いちめんにただよいながら、新しく加わった仲間を迎えている。というのである。原田氏の訳は次のごとくである。

感興五首　其三

南山何其悲　南山なにぞかく悲しきや
鬼雨灑空草　ものめく雨は　草むらに　そそいで消えぬ
長安夜半秋　こよひ長安に　秋は　深きに
風前幾人老　風の前に　老ゆる幾人
低迷黄昏道　たそがれの道　さまよひ来れば
裊裊青櫟道　ざやざやと櫟林よ
月午樹立影　月たかし　樹にかげもなく
一山唯白暁　山　なべて　白き暁
漆炬迎新人　漆炬は　新しき死人を迎え
幽壙蛍擾擾　幽壙のべに　おびただし　蛍とびかふ

所で「李賀研究」第四号に、次のような旧訳がかかげられている。一九四一年八月三十一日の訳とされている。

山にかかつてから何故かう悲しくなつてくるのであろう
（ほそぼそときこえるのはなに）
「長安の夜半の秋を
風前に老ゆる幾人」
（いや　たれも　をらぬ）
黄昏の径はおぼおぼ消え
櫟の林はざはざはと空に鳴る
月午　樹々は影を喪つた
山は　白い暁
たいまつは　新しい亡者を迎え
幽壙をめぐつて蛍のおびただしさ

この旧訳と、現在の訳との何というちがいであろう。これを読めば、世の訳者はことごとく、その訳稿を、恥ぢて火に投ずるであろう。